

哲學研究 第十九號

一二三

社會學 普通講義 米田講師 二時間 現代社會學の根本問題

問題

特殊講義 同 ツェルケム及び「社會學年報」派の社會學

演習 同 同 Lamprecht, Moderne Geschichtswissenschaft. Wundt, Elemente der Völkerpsychologie.

講讀 同 一時間 Giddings, Descriptive and Historical Sociology.

○副科目

英語 烏助教授 三時間 Sir Ray Lankester, The Kingdom of Man.

ロムニア語講師 同 Selected Texts.

成瀬講師 甲二時間 小獨語教材

同 乙同 獨逸精神

佛語 オリアンチヌ講師 甲同 Choix de Lectures Françaises Cours élémentaire.

同 乙同 Cours complet de Langue Française Cours élémentaire. Choix de Lectures Françaises Cours Supérieur.

希臘語 新村教授 一時間

佛教講義 熱田講師 甲二時間 三論玄義 同 乙二時間 起信論

生理學 石川醫科大學教授 同

新著紹介

心理學

文學士 高橋 穰著

凡そ今日の學界に於て或學問の體系を組織せんとすることは容易の業でない。殊に現今の日本に於て心理學の體系を組織し之を發表せんとすることは極めて困難の事に屬する。著者疊を出でて未だ十年に滿たざるに漢にはエッピングハウスの心理學提要を譯して我學界を裨益し今又自家の心理學體系を組織して既に之を粹に上す吾人は先づ著者の努力と勇氣とに對し多大の敬意を表せんとするものである。

著者は飽達科學的立脚地を嚴守し科學的敘述と哲學的考察とを峻別し且つ一々の問題に對して猥りに私意を挿まず疑問を疑問として取扱つて居る態度は著者の所謂問題の所在を明かにせんとする第二目的を最も能く達し得たるものと思はれる。又各處に散見する各種の實例は極めて適切にして悉く肯綮に中り恰かも著者が其所説に多くの示唆を受けたりといふエッピングハウスの著を讀むが如き感を起さしめ所謂機能主義と構成主義とを調和せんとする第一目的に對し尠からざる寄與をなして居ることと信ぜられる。然るに著者の云ふ所によれば時日の不足と紙數の超過とは本來の計畫を變じて人格論の一篇をば他篇の一章に短縮せしめた

いふ事であるが是の如きは著者の所謂第一目的を達するに於て甚大なる損失たるを免れず著者が充分の時日と制限なき紙數とを與へて其遺著を傾注するの舉に出でられざりしことを吾人は返す返すも遺憾に思ふ次第である。更に又諸家の研究の結果及見解を引用するに際し其出典を明示して居られしならば著者の所謂第二目的を達するに於て讀者を益する蓋し尠少でなかつたらうと思はれる。然るに毫も此事のなかつたのは恐らく亦前述の如き困難を有せられたためと思はれるが是亦甚だ遺憾に堪へざることである。

是れ吾人が現今の日本に於て心理學の體系を組織し之を發表するは極めて困難なりと云つた所以である。今本書を一讀して吾人の蒙を啓きし所少くない。此點に於て著者に對し滿腔の謝意を表する。吾人亦心理學の諸問題に對し多大の興味を有する者であるが未だ深き考察を遂げず確固たる見解を有するに至つて居らぬ。其故に本書に對する透徹せる批評は他に其人あるべしと信じ吾人は唯本書の内容の概要を紹介し併せて讀過の際思ひ浮びし所感の一端を略叙し一は以て讀者の手引たらしめ一は以て著者に對する謝辭に代へんとするのである。

本書の内容は四篇より成り第一篇に於て精神の概観を示し先づ經驗の分化よりして精神現象を導き來り心理學を以て精神現象を研究する學なりとして居る。又精神作用の根本特質を論じ意識は精神の本質にして其存在は基本要素なりとし其機能的根本特質をば注意と記憶とに歸し意識と身體活動との關係に現はれたる特色として表出法をあげ更に又精神作用の概観と題し物心平行論、感覺運動圈、循環活動、意識の分析等のことを論じて居る。次に第

二篇に於ては主として所謂分析的立場より精神の抽象構成要素を見基本法則に就き論じて居る。其抽象的構成要素に關しては先づ其意味を明かにし次に所謂抽象的構成要素の細説に入り感覺に就ては感覺の分類、有機感覺、運動感覺、皮膚感覺、味覺及嗅覺、聽覺、視覺の順序にて叙し感覺と刺激との一般關係を論じ單一感情につきては其概念、種類、特質、結合及本質を説き終りに意志、心像、意識は之を要素として許すべきや疑問なりと云つて是等に關する諸説をあげて居る。更に基本法則に關しては既に第一篇に於てあげたる所謂意識の機能的根本特質たる注意と記憶とに就き其一般性質の詳細なる敘述をなして居る。更に第三篇に於ては稍機能的見地を混へて具體的なる要素につき考察し其結合の状態につき論述し之に加ふるに人格及個性の論を略述して居る。即先づ具體的構成要素の意味を明かにし次に知覺に關しては空間知覺、時間知覺、變化及運動の知覺の諸作用を詳述し更に知覺表象の再生に就き論述し意志に關しては其定義、分類、發達を論じて諸意志作用を分ち述べ意志自由の論に及んで居る。此の如くして遂に思惟の論に入り其本質、概念、判断及推理等の性質を極め終りに前述の如く人格及個性に就き略述し所謂具體的精神活動の情態を概説して以て前二篇の總括として居る。最後に第四篇に於ては心理學の根本問題と題して心理學の對象及方法並に心的因果に就きて述べて居るが主としてウンントの所説を批評し並に自家の見解を開陳して居る。

今全篇を通覽するに第一篇に於ける根本思想は多く元良博士の見解に出でたるが如く第二篇の基礎概念はエッピングハウスの著

に負ふ所大なりしは著者の明言するが如くであり第三篇の殊に人格論はジエームスの所見を參酌する所少なからざりしが如く而して全篇を通じて多くの材料をヴント其他の著よりとり來り之を總括するに著者獨特の識見と蘊蓄とを以てして居る。吾人は到る處に於て著者の面目を發露することが出来るが特に能く之を窺知し得るは寧ろ第四篇にある。此篇は前既に述べたるが如く心理學の對象及方法並心的因果につき論じ重にヴントの批評より成つて居るが殊に心理學の對象及方法の論に於て心理學に對する著者の立場を最も能く窺ふことが出来ると思ふから茲には主として此章に現はれたる著者の見解につき所感を簡單に述べやうと思ふ。

前既に述べたるが如く著者に從へば心理學は精神現象の科學である。然るに精神現象とは果して何であるか。通例之を物質現象と對立せしめ説明して居るが勿論常識に於ては兩現象の差違は甚だ明瞭であつて殆んど何等の説明を要せぬ程であるが一步進んで考察するときはしかく明瞭なる區別を立てることは出来ぬ。之に關して著者はヴントの直接經驗の見方の違に存すとの見解を難じて居るが見方の違即對象の違なりと定むれば考方により如何様にもなるやうに思はれる。直接經驗と雖研究の對象となるときは亦間接經驗となり了すべしとの考は吾人も同感であつて著者の評せる如くナトルプの如き意味の心理學は到底哲學たるを免れずと考へられるが併し其場合に於ても研究の對象となり了せる直接經驗と客觀の間接經驗(假りにかく名く)とは何等かの別は存し混同することが出来ぬやうに思はれる。是等の問題に關しては吾人も未だ充分の考察を遂げて居らぬから今詳細なる論をなすことは出来

ぬ。唯茲に吾人の物足らず感ずるのは意識に關する著者の見解に就てである。著者は第一篇に於て意識は精神の本質なりと意識の存在は證明を要しない基本要求なりとして居るが其のみにては不明である。意識其者の考察は勿論或は哲學的になるかも知れず而して此の如きは科學的敘述に於て寧ろ避くべきではあるが科學の問題も其根本に溯れば勢ひ哲學的考察に近かざるを得ぬ。此點に於て科學者と雖唯に背景としての哲學的見地を有するのみならず根本問題の解明に際し幾分哲學的態度を持するを妨げぬ。殊に意識の問題は根本問題中の根本問題である。従つて何等か之に關する著者の抱負を窺ひ得たならば心理學の研究の對象に關する著者の見解を更に明かにすることが出来たであらうと思はれる。次に心理學の研究法に關しては其研究の對象が既に自然科學と同様直接經驗の内容即經驗の客體であるから其研究法も亦本質に於て自然科學と同様でなければならぬと云つて居るのは吾人と其所見を一にして居る。但し其擧げて居る方法上の困難は何れも實に困難に過ぎないのであり他の自然科學の方法上に於けると其性質を異にするものにあらず單に程度の差に過ぎぬと見ることが出来る。著者も一體に於て之を許して居る如くであるが一方に於て實驗的條件により同一過程を反復することの困難をあげ他方に於て物理的現象は一定の條件を具備せしむることにより同一現象を反復することは不可能にあらずと云つて居るが是亦畢竟同一の事情にあるのではなからうか。嚴密にいふときは物理現象と雖反復は不可能ではなからうか。併し反復の可能不可能は實驗の可能不可能を決定する所以ではなからうかと思はれる。要するに困難の程

度の差違は存するも心理學に於ける 研究法と他の自然科学に於けるものと性質を異にするものと考ふことは出来ぬではなからうか。所謂行動主義に關しての著者の見解は能く其謬點を指摘して居る。行動は唯研究の手段に過ぎずして研究の對象にあらず若し研究の對象を以て行動なりとせば是は行動學(此の如き學が成立し得とせば)にして心理學と稱することを得ぬ。但し行動主義の所論は不當であつても其研究の結果は心理學の材料として充分の價值を有し得ること亦著者の言の如くであらう。著者はなほ補助的研究法としての統計法のこと論及して居るがこは恐らく狹義の統計法を意味し主として發問法の如きものを指して居るのだらうと思はれる。之に對しては吾人も亦習練ある専門家が周到なる用意を以てせば適當の價值を齎らずであらうと思はれるが寧ろ其弊を醸す場合が少くないから學者は大なる警戒を要すること吾人の常に注意する如くである。若し夫れ構成主義か機能主義かの問題に關しては吾人は此の如き區別を立するの煩を厭ふものである。凡そ研究の結果を組織するに當りては分析綜合の何れか一方のみによりてせんとするものあらば無謀も甚しきものであるといはなければならぬ。意識現象が統一的であるといふことはそれが分解を許さぬことを意味するものではない。又其孰れかに重きを置く點より此兩主義を分つとすれば多少の意味あるやうであるが科學たる以上は分析に重きを置かなければならぬこと勿論であつて幾分應用的傾向を帶ぶるに當りて綜合を主とするは亦當然の勢であると云はなければならぬ。心理學に於ても心理學其者よりも之を基礎として成る他の精神科學に於て此傾向の著しきも亦之

がためである。之に關しては著者は第二篇の始に於て抽象的構成要素の意味でふ題下に最も明瞭に述べて居る。

以上は主として心理學全體に關する議論であるが部分的諸種の問題に關しては茲に論述するの餘裕を有しない。今は唯氣附きし疑點の二三を列擧するに止めやうと思ふ。第一有機感覺の要素の不明なることは分析的研究の未だ不充分なることに歸して居るがこれは寧ろ非分化でふことに有機感覺の特色があり分析的研究の將來可能なりや否やは疑問ではなからうか。此の如きは所謂生物學的の研究本能の研究に没頭する人の最も注意すべき點ではなからうか。次に感情の方向に關しては多様でふことと根本方向とは峻別すべきことであり感情が多様であるといふことは其根本方向の一たることを妨ぐるものではないではなからうか。更に又忘却の説明に際し記憶は過去を美化する過去の不快なことは忘却せられ快なことのみが記憶せられると稱してふことを記して居るが忘却するは不快な出来事にあらず再生に際し感情が快化するによるのであつて不快な出来事は寧ろ忘却しがたいと見るべきではなからうか。

終りに臨んで吾人は此の如き眞摯なる心理學書の我學界に現はれたるを讀者と共に衷心より喜び著者の勞に對し謝意を表せんとする者である。東京神田南神保町十六、岩波書店發行、定價壹圓二十錢。(千葉胤成)

原始基督教

石原謙共譯
山谷省吾

原著はライプチヒの老教授ゲオルグ・ハインリチの "Das Urchristentum"